泥くさく暑苦しい 情熱ステージ！

全力で、カッコよく！――音楽が流れると、スイッチが入ったように踊り出す福田さん。年間150回近いライブ活動を行っている

〝仮装大賞〟優勝アイドル

【神奈川県平塚市】プロのダンサーになる夢をかなえた人。アイドルはアイドルでも、踊るアイドル。時には「水着でライブする、うわさの人」とも言われ、踊るグラドル（グラビアアイドル）に。そんな福田亜理沙さん（32）＝女性部員＝が、あの人気番組の〝仮装大賞〟で優勝した！という。役柄は？　「黒子です」。母・ひとみさん（62）＝支部副女性部長＝に支えられてきた芸能活動。ここに来て路線変更だろうか――。（2月18日付）

本年1月放送された「欽ちゃん&香取慎吾の第100回全日本仮装大賞」。お茶の間に笑いを届けてきた、人気の長寿番組だ。今回は応募総数3580組の中から、予選を勝ち抜いた34組が出場した。

優勝を飾った作品のタイトルは「白黒映画」。一人の侍が、次々と敵を斬り倒していく。映画さながらの迫力シーンが初めは白黒で描かれ、最後はカラーに。数十人の黒子による傑作だ。

もはや、福田さんがどこにいるのかは分からない。「途中で出てくる、鶴と紅葉、あと最後の『完』を持っているのが私です」

そんな中、優勝インタビューのマイクが福田さんに向けられると、アイドルユニット「5％BERMUDA」の「福永ありさ（芸名）さん」として紹介された。

俳優やミュージシャンなど、夢を追い駆けるメンバーで構成された、今回の黒子たち。福田さんが最初に抱いた夢は、プロのダンサーだった――。

ダンス好きの両親のもとに生まれ、小学校1年の時からダンス教室へ。ところが、「恥ずかしがり屋で、初めは人前に立てなかったんです」と福田さん。

レッスンは、いつも後ろの端っこ。「ダンスの講師よりも、ママの近くにいたかった」

それでも母は、「ダンスが楽しい」と言う娘を信じ、才能の開花を祈り続けた。

小学校4年の時からは、少年少女部の合唱団にも所属。

〝仮装大賞〟優勝の喜びを、アイルユニットを組む珠奈さんと一緒に（本人提供）

メンバー同士で題目を唱えるようになると、「母の祈りを感じるようになって……」。

〝お母さん、お父さんに喜んでもらいたい〟と思うと、〝恥ずかしがり屋〟は徐々に影を潜め、人前で踊る自信をつけていった。

そうして小学校5、6年の時には、音楽アーティストのバックダンサーに。夢に見たコンサートホールの舞台に立っていた。〝もっともっと、踊りたい！〟

中学生の頃、福田さんは都内のダンス教室に通った。講師は、日本のダンスミュージックをリードしてきた有名アーティスト。プロデビューを目指し、本格的に教わった。

この頃になると、学校でも音楽が流れているだけで、自然と体がリズムに合わせて動くように。「それが、周囲のかんに障ったのかも」。いじめを受け始めた。

「痛っ！」

ある日、上履きの中に画びょうが入っていた。次第にエスカレートし、上履きが無かったり、教科書が破れていたり。母が作ってくれた弁当がトイレに捨てられたこともあった。

〝学校に行きたくない。家にこもっていたい。死にたい……〟

ふさぎ込む気持ちを解き放ってくれたのも「ダンスだった」。

踊って踊って、踊り倒す。その姿に思いがあふれ出ていた。

〝負けたくない！〟

福田さんには、強力な応援団も。母と共に参加した座談会で、よく声をかけてくれる女性部の先輩たち。「いつも頑張ってるね」「テレビに出られるといいね」

そんな一言が、心の支えになった。「いじめられたからこそ、人の励ましのありがたさが身に染みたんだと思います」。感謝の気持ちが込み上げた。

高校に進むと、いじめられることはなく、ダンスに専念できる環境に。母娘で祈ってきたことが、また一つかなった。

しかし卒業前、幾つもの病と闘ってきた父・正明さんが、霊山へ旅立った。享年45歳。「父は未入会だったけれど、座談会に参加し、信仰の正しさは分かっていたみたい。浮き沈みの激しい芸能界で生き残れるよう、娘の私には『信心をしっかり続けなさい』って」

母の一言「福運だよ」

高校卒業後、福田さんはプロのバックダンサーとして活躍した。

座右の銘に「猪突猛進」を掲げ、ダンサーの道を駆け上がる。

程なく「オーディションで約1000人の中からセンターポジションに選ばれたダンサー」と紹介されるように。「ドーム、アリーナ、武道館といった大舞台で踊りました」

だがそこは、少しでも良い位置で踊りたいという、ライバルとのポジション争い。メンバー同士の中傷にうんざりしたことも。気付けば、ダンスが楽しくなくなっていた。

未来部時代に学んだ池田先生の指針。母からも同じことを何度も言われてきた。「福運をつけるんだよ」

題目に題目を重ね、決断した。それが2020年（令和2年）に結成した「5％BERMUDA」である。

「小さな舞台でも、自分たちのやりたいパフォーマンスで皆さんに喜んでもらいたい」

以前は数万人の観客の前で踊ったが、ユニット結成後はわずか数百人。それでも「手ごたえは十分だった。

オーディションで選ばれたボーカルの鈴木珠奈さん（33）＝女性部員＝も「後から聞いたら、創価学会員で」。歌手になる夢を諦め切れず、会社員を辞めて応募してきた。

お互い、キャリアをなげうっての再挑戦。2人は、命の根っこにある信心を基にした。

「自他・彼此の心なく、水魚の思いを成して、異体同心にして」（新1775・全1337）。双方の良さを引き出しながら、映画の主題歌に抜てきされるなど実証を示してきた。

信心根本に励まし続けてくれる母・ひとみさんと

芸術部員でもある福田さんには、心に刻む池田先生の言葉がある。

「大陽のごとく明るく、富士のごとく悠然と、わが人生の劇で勝利していただきたい」

仮装大賞への挑戦を決めたのも、自分らしく「家族が喜んでくれるから」と笑顔で。舞台の立ち位置が、センターでも黒子でも全力を尽くす。

「これからも、人生を懸けた泥くさくて暑苦しい、情熱ステージをお届けします！」

イノベーションも、サステナビリティも
支える、TOMOWEL。
企業のヘルスケア事業を支援し健康な社会をめざす
盗撮防止機能のあるユニフォームの素材を開発
従業員のエンゲージメントを高める教育コンテンツの開発
紙のラミネートチューブやパッケージを開発してサーキュラーエコノミーに貢献
「こんな未来を支える取り組み」紹介中
〒112-8501 東京都文京区小石川4-14-12　https://www.kyodoprinting.co.jp/
TOMOWEL | 共同印刷株式会社